

## 《特別寄稿》父 有坂磐雄のこと



有坂 文雄(15 期)

先日、高1ゼミで「蛋白質の時代」という題目で話をさせていただきました。蛋白質には多くの種類があって、これが実際に生命現象を支えている分子であること、ヒューマンゲノム・プロジェクトが終わり、ヒトゲノムの全塩基配列が明らかになった今、ゲノムの中のどこにどの蛋白質がコードされていて、それらの遺伝子の発現(蛋白質の生合成)がどのように制御されているかが今後の課題である、というようなことを話しました。授業は2回行い、2回目は高1以外の興味のある人、ということでしたが、特に後の方でたくさん質問が出てうれしく思いました。その質問してくれた受講者の中に、私の東工大の同僚で、癌のために数年前に急逝された青野力三先生の息子さんがおられて驚きました。元気にやっておられるようで安心もし、また父君の分野に近い遺伝子や蛋白質に興味を持っておられることも嬉しく思いました。

さて、ゼミの講師として久しぶりに母校を訪れた折に、「栄光アラムナイ」の編集部から、高1ゼミの話を紹介しながら、物理を教えていた私の父のことを書いてほしい、と言われました。せっかくの機会ですので、以下、父 磐雄について書いてみたいと思います。父が亡くなってから35年が経ち、現在の生徒や最近の卒業生はもちろん、現職の先生方の中でも父をご存じの方は少なくなったと思います。

父は明治36年(1904)生まれで、昭和45年(1970)に66歳で亡くなりましたが、戦後、亡く

なるまでの後半生は旭電機嘱託と栄光学園の講師を勤め、栄光では最初の頃は物理、後には技術を教え、物理部のお世話もしていました。

父は学習院初等科を卒業後、一中を経て大正9年8月に海軍兵学校に入り、卒業後、海軍水雷学校通信科(後の海軍通信学校)に入校しました。卒業後は「金剛」、引き続いて「長門」の通信長を勤めました。その後、昭和2年3月に、前年に逓信省に提出していた私設無線電信電話実験局の免許が交付され(JLYB)、日本における短波の個人実験局(アマチュア無線)の第1号となりました。ちなみに大正14年には軍官共に短波で外国との交信に成功して、ようやく短波通信の機が熟してきた頃だった、という話です<sup>1)</sup>。大正15年にアマチュア無線連盟(JARL)ができ、37人の盟員の中に父も名を連ねています。当時はそれほど電波法規の取り締まりが厳しくなくて、無免許(アンカバ=under cover)の通信が横行していたようです。父は海軍の上司からは「君は第1号だから慎重に行動するように。」と言われたということです。

その後、昭和6年4月、海軍から東北帝大に依託学生として派遣され、八木アンテナで知られる八木研究室に学びました。大学生と言っても既に27歳になっており、理論は別として、実践面では技術を磨いていて、H氏によれば父は「宇田式超短波装置の宇田博士にとっては懐刀であった」ということです<sup>2)</sup>。

東北大学卒業後、鎌倉市材木座に移りました。その後、戦争直前には3年間の予定で米国に駐在武官として赴任し、プリンストンに住まいながらニューヨークで仕事をしていたようです。米国滞在中に日本から、当時中佐だった父に、米国におけるレーダーの開発の

状況を報告するようにという命令が出、報告をしている記録が残っています。最初は3年の予定でしたが、その年の暮れには戦争に突入しそうだという情報が入り、命を受けて急遽帰国することになりました。しかし、既にパナマ運河は閉鎖され、南米の最南端マゼラン海峡を回り、インドネシア、フィリピンを経由して帰国しています。

私が子供の頃、家には鍋やスプーンなど、米国製の調理用品がいくつかあって、父がアメリカのものは長持ちするし、使い勝手もいいんだよ、というようなことを言っていたのを聞いた覚えがあります。そのほかにもブラジルに寄港した際には大きな蝶の標本、インドネシアを通ったときには民芸品の影絵の人形などを買い求めてきました。いよいよ戦闘開始かという緊迫した情勢の中で、ずいぶんのんきな軍人だったように思えますが、実情はどうだったのでしょうか。

戦時中、父は航空機用のレーダーの開発を行い、関係者と共に自ら飛行艇への取り付け作業を行ったり、南方に出かけてパイロットへのレーダー講習を行いました。この間の事情は平成4年の『丸』別冊に「日本海軍の電波探信儀」という記事の中で松井宗明氏が詳述されています<sup>3)</sup>。なお、昭和17年8月には「水晶発振子の考案完成」、19年3月には「航空機用隊内無線電話機の考案完成」に対して海軍技術有効賞を得ています。「この賞をもらった人はたくさんいるが、2つもらった人はほとんどいなかった」そうで、これはちょっと自慢のようでした。

父は戦後、「航空兵器の全貌」という本の1章を担当して書いています。私の専門外で中身はよく分かりませんが、序文には航空機搭載用のレーダーを担当開発していた自分

の責任として記録を残す、と書いてあり、最後のところに、終戦直後、進駐軍の将校がやってきて、技術的な問題について語り合ったことが書いてありました。相手は大変紳士的で、戦勝国・敗戦国などという区別なしに、技術的な問題について率直な討論ができた、ということです。「負けたからといっていじけることはない。」と書いてあるのが印象的でした。

父は戦時中、私のすぐ上の姉の誕生後まもなく妻を産褥熱で失い、戦後、5人の子供を抱えて困っていたところ、ある海軍関係の方の紹介で、当時鎌倉女学院で地歴を教えていた松澤言子を後妻に迎えました。私と弟の母になります。私は小学校の高学年まで、上の兄弟姉妹と母が違うことを知らないで育ちました。すぐ上の姉もそうだったようです。ある時、父が勤めに出た後、母はその頃父に反抗的になっていた私に、父が前のお母さんを亡くした後、どんなに苦労して子供たちを育てていたかを話して私を諷めたのですが、その時初めて母が後妻であったことを知りました。母によれば、父が時々朝食などを作ってくれるのは、妻を失った後、5人の子供たちに食べさせるために必要に迫られて覚えた料理なのだ、ということでした。

さて、栄光で父が講師を勤めることになったきっかけは、田浦で戦後処理の仕事をしていた時に、ちょうど栄光学園がそこに設立されることになり、現地検分に来られた方々の中でウルフ先生が物理のご専門で、話しているうちに教育問題などで意気投合したのだそうです。きっとあの懐かしい、かまぼこ兵舎を改造した理科校舎で語り合ったのでしょう。それから亡くなるまで、栄光で物理から技術を教え、海の家では水泳の指導をしたりしました。私の自宅の部屋の壁には父が海を家の屋外で、自ら製作した「大正ギター」(大正琴

にギターの共鳴胴をつけたもの)を楽しそうに弾いているところを数人の生徒が(けげんな顔をして?)見つめている写真が飾ってあります。

田浦といえば、小学生の頃、体育祭の時に、よく父に連れられて栄光を訪れたものです。朝早く家を出て、運動場に拡声機などの配線をしていた父を横から眺めていたものでした。記憶が正しければ、いつの体育祭だったか、ブラスバンドの指揮をされていたのが後の作道先生で、「カッコいい」お兄さんをあこがれの目で眺めたものです。体育祭の片づけも終わって夕暮れ時、帰りは父と共にウルフ先生がジープで田浦駅まで送って下さいました。



左から 私(文雄)、ウルフ先生、父、稲田先生

紙数が尽きました。機会が与えられましたので、父のことを少し振り返ってみました。

[注]

1) 『電波と共に 有坂磐雄伝』(岡本次雄編、非売品、1980年)

2) 上掲書

3) 松井宗明「日本海軍の<sup>レーダー</sup>電波探信儀」『丸』別冊 太平洋戦争証言シリーズ 20.  
pp.206-236 (1992)